

太宰治・作 「富嶽百景」より抜粋

東京の、アパートの窓から見る富士は、くるしい。冬には、はつきり、よく見える。小さい、真白い三角が、地平線にちょこんと出ていて、それが富士だ。なんのことはない、クリスマスの飾り菓子である。しかも左のほうに、肩が傾いて心細く、船尾のほうからだんだん沈没しかけてゆく軍艦の姿に似ている。三年まえの冬、私は或る人から、意外の事実を打ち明けられ、途方に暮れた。その夜、アパートの一室で、ひとりで、がぶがぶ酒のんだ。一睡もせず、酒のんだ。あかつき、小用に立って、アパートの便所の金網張られた四角い窓から、富士が見えた。小さく、真白で、左のほうにちょっと傾いて、あの富士を忘れな。窓の下のアスファルト路を、さかなやの自転車が疾駆《しゅくしゅ》し、おう、けさは、やけに富士がはつきり見えるじゃねえか、めっぽう寒いや、など呟《つぶや》きのこして、私は、暗い便所の中に立ちつくし、窓の金網撫でながら、じめじめ泣いて、あんな思いは、二度と繰りかえしたくない。

昭和十三年の初秋、思いをあらたにする覚悟で、私は、かばんひとつさげて旅に出た。

甲州。ここの山々の特徴は、山々の起伏の線の、へんに虚《むな》しい、なだらかさに在る。小島烏水という人の日本山水論にも、「山の拗《す》ね者は多く、此土に仙遊するが如し。」と在った。甲州の山々は、あるいは山の、げてもものなのかも知れない。私は、甲府市からバスにゆられて一時間。御坂峠《みさかとうげ》へたどりつく。

御坂峠、海拔千三百米《メートル》。この峠の頂上に、天下茶屋という、小さい茶店があつて、井伏鱒二氏が初夏のころから、ここの二階に、こもって仕事をして居られる。私は、それを知つてここへ来た。井伏氏のお仕事の邪魔にならないようなら、隣室でも借りて、私も、しばらくそこで仙遊しようと思つて来た。

底本：「筑摩現代文学大系59 太宰治集」筑摩書房

1975（昭和50）年9月

初出：「文体」

1939（昭和14）年2、3月

入力：網迫

校正：割子田数哉

1999年1月9日公開

2011年12月10日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp>）で作られました。入力、校正、制作にあたっては、ボランティアの皆さんです。